

石井伸男教授定年退職記念号発刊に寄せて

高崎経済大学経済学会理事 岡田和彦

平成20年3月31日をもって、石井伸男先生は本学を定年退職されます。

石井先生は昭和17年11月、東京都杉並区でお生まれになり、東京都立大学付属高等学校、東京都立大学人文学部、同大学経済学部、東京都立大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程、同大学院博士課程を経て、昭和50年4月～57年3月には東京都立大学人文学部助手を勤められました。そして、昭和52年4月～57年3月、高崎経済大学経済学部の非常勤講師を勤められた後、昭和57年4月に高崎経済大学経済学部助教授に就任されて、以来、昭和63年からは教授として、社会思想史、社会科学概論、哲学総論、社会哲学、哲学などの講義をご担当になり、さらに平成14年4月からは高崎経済大学大学院経済・経営研究科修士課程演習担当教授、平成16年4月からは大学院後期博士課程演習担当教授として、26年の永きにわたって本学の研究・教育に携わってこられました。

この間、石井先生は、平成6～8年および平成10～12年には付属図書館長、平成8～10年、14～16年には教養教育委員長、平成12～14年には経済学科長、平成12～14年には評議員、平成14～18年には付属情報センター所長、そして平成18年4月～20年3月には経済学部長として、本学の発展のために多大なるご尽力と深甚なるご貢献をしてこられました。

石井先生は、学究生活の初期から現在に至るまで一貫して、近代から現代におよぶ社会の全体構造を体系的に把握しうる論理を解明すべく、主としてヘーゲルとマルクスを研究してこられました。その光り輝く成果は『マルクスにおけるヘーゲル問題』（御茶ノ水書房、2002年）に結晶しています。その研究過程で、まず、人間のもつ社会意識という問題領域を重要視され、意識の機能が真理の認識を目指すだけでなく価値意識をも含むことを正当に評価し位置づけるべく、『社会意識の構造』（青木書店、1986年）をまとめられました。さらに、社会意識の形成において知識層の果たす役割の重要性を見出され、それを、戦中から戦後にかけて我が国において独自の知識人論を展開した文学者、花田清輝において再認識すべく、『転形期における知識人の闘い方—甦る花田清輝』（窓社、1996年）を著されて、知識人と民衆との関係を新たな視点から把握し直すという学術的功績をあげられました。

このように重厚かつ広汎な見識に支えられた先生の碩学は、『マルクス・カテゴリー事典』（青木書店、1998年）の編著にも携わられたことに示されています。

その飽くなき探求精神は現在もご健在で、1990年代からの世界のラディカルな変貌を鑑みられて、アーレント、ハーバーマス、ロールズらの研究を通じて「アソシエーション（自発的結合）型社会」における「市民的公共性」の意義の重要性を解明すべく、さらなる学究の道を邁進されています。

このように、石井先生は研究者として、さらには大学運営の中枢にある者として、稀有なご活躍をしてこられました。その勇姿はまさに、疾風迅雷にたてがみをなびかせて大空を雄々しく飛翔する龍馬のごとく、われわれの臉に焼き付けられています。

先生はまた、深く豊かな地下水脈のごとく、情熱的精神と冷静なる頭脳、そしてやさしき心をもて、大学教員の鏡として、われわれに無限の教示を与え続けてくださいました。このご恩は決して忘れません。

光明に満ちた輝く将来へ向けて、偉大なる人が踏み出す新たなる門出にあたり、ともに玉杯を乾さん。